
エターナルコア

鉢嶺来

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エターナルコア

【Nコード】

N7387L

【作者名】

鉢嶺来

【あらすじ】

この世にはウィザードという魔法を使える人種とそれ以外の人種、コモナーが存在する。

ある戦争でコモナーの傭兵「赤髪のバーギル」はウィザードと初めて出会い、その絶対的力の前に無残に敗北する。

あのウィザードは俺が殺す。そう誓ったバーギル。

それからバーギルとウィザード・パティーシアとの因縁の日々は

続いた。

そしてパティーシアには重大な秘密が隠されていて……？
魔法アクション活劇、ここに開幕。

パティーシアとバーギル

飄々とすすき野が啼く荒野・・・

二つの人影が争いを繰り広げていた。

緑色の髪をたなびかせ漆黒のコートを身にまとう17、8歳の女。

赤色の髪が目に見えぬ闇に隠れ、長剣を振るう24、5歳の男。

女が呪文を唱え杖を振りかざすと空中にルーンの文字が浮き上がる。

ルーンから次々と発射される炎の矢。

男はそれらを回避し、長剣で叩き落とす。

「貴様との決着を、今日つける！」

男はそう叫ぶと一足飛びで女の下へと飛び込んだ。

刹那、

長剣が女へと振り下ろされる。

…が、女は一瞬にしてその場から消え、そして男の頭上高くに姿を現した。

「フレイム」

女がそう言い杖を下へと向ける。

ルーンが表れ炎の矢が男の頭上を襲った。

ゴウ！

男は長剣を薙ぎ、炎の矢を掻き消す。

「パーティーシア！覚悟！！」

そのまま男は女…パーティーシアに突きを繰り出す。

「ミュラ」

パーティーシアがそう唱えると障壁が現れ長剣を遮った。

「フロティン」

ふわりとパーティーシアの体が浮き上がり男のおよそ3m先へと着地した。

「あなたでは私に勝てないわ、バーギル…」

「なんだと・・・！？」

「わかるでしょう・・・？あなたがどんなに凄腕の傭兵だったとしても所詮は剣士、魔法使いには勝てないのよ」

この世には魔法を使うもの、ウィザード、そして魔法を使えない

もの、コモナーがいる。

そしてそれに付きまとう一つの常識。

コモナーはウィザードには勝てない。

バーギルはそれを打開したくて傭兵になった。

腕も磨いた。

それはもう「赤髪のバーギル」と呼ばれるほどに。

そして1年前、とある国の戦争に参加したバーギルの前に姿を現したのがパーティーシアだった。

バーギルにとって初めて見るウィザード。

その力は圧倒的だった。

2万対1。

そのウィザードが呪文を唱え杖を振るう。

落雷が落ちて、炎が飛び、氷塊がバーギルたちを襲った。

ほぼコモナーの傭兵で統率された軍団は抗うこともできず、「魔法」という絶対的な力の前にある者は焼かれ、ある者は戦意を失い逃げ出した。

2万いたはずのその数がほんの10分で1対1になった。

最後に生き延びたのがバーギル。

死を覚悟したその時、そのウィザードは

「飽きたわ、どうせもうほとんど壊滅状態だし、この辺でいいでしょう」

と言つて姿を消した。

その日からバーギルは己の無力さを呪い、嘆き、更に腕を磨いた。

打倒パーティーシア、それだけが生きる目標になっていた。

「終わりにしましょう、バーギル、この・・・無意味な戦いに！」

パーティーシアが叫ぶ。

「フレーミア」

杖をかざすとルーンが浮かぶ。

そこから音速ともいえる勢いで光が奔った。

「く…おおおお！」

すんでの所で横に避けるバーギル。

ドッゴオオオオン……………！

光は遠くにある岩山に激突し岩山は木っ端微塵になった。

「俺は…俺は負けん！」

長剣を構えなおすバーギル。

「これだけの力の差を前にまだ向かってくる勇氣は認めるわ、ただ…時間ね」

気づくと二人の周りに人影が2つあった。

「なんだ…貴様ら…！？」

バーギルが叫ぶ。

「あなたも私も組織を抜けて追われる立場…さしずめどちらかの追っ手…かしらね」

そう言つとパティーシアはふう…と溜め息をつき、

「いや、両方の…と考える方が妥当かしら」

パティーシアが言うや否や二つの人影はパティーシアとバーギル目掛けて突っ込んできた。

「ちい…あの仕事を辞めたツケがこんな所で回ってくるとは…な！」

バーギルは振り返り人影のうちの一つに剣を振り下ろす。

しかし人影…30代くらいの男だろう…はその斬撃を避け「杖」

をバーギルへと向けた。

（ちいい…こいつ…ウィザードか…！）

「…ファイアボール」

男が唱える。

咄嗟に目を瞑るバーギル。

しかし何時まで経っても炎の塊は襲ってこなかった。

「…？」

男は不思議そうに杖を振りなおす。

「サイレンス…ウィザードならこの魔法…知ってるわよねえ？」

サイレンス、それはウィザードが魔法を失う「沈黙」の魔法。
尤も、一流のウィザードなら戦いの前にサイレンスに対する事前
策を打っている。

このウィザードにサイレンスが効いた事からパティーシアは

「このウィザードは3流だ」という認識をした。

「何故…赤髪のバーギルを助ける？」

男はパティーシアに向かって言う。

「あら、だって2対2でしょ？」

「ふざけんな！誰が貴様なんぞに！」

「貴方の相手は『これ』よ、バーギル」

槍を構えた男がパーティーシアに突進してくる。

「貴方との決着は後回し…まずはこいつらから、ね？」

「…ちっ」

バーギルは長剣を構えなおすとパーティーシアの後ろへと移動し槍の男の突きを薙ぎ払う。

「ここは組んだ方が得策だわ、コモナーはコモナー同士、仲良くやりなさい、

私はこの間抜けなウィザードの相手をしてあげる」

「どうやら…そうらしいな！」

バーギルの長剣が唸る。

槍を凌ぎ、攻める。

その光景を見てからパーティーシアはウィザードの男に振り返る。

「さて…貴方の力…見せてもらいましょうか…？」

不適な笑みを零しパーティーシアが跳んだ。

「アニムレーション！」

ウィザードの男は沈黙の魔法を解除する。

そして杖をパーティーシアへと向ける…がそこにパーティーシアの姿は無かった。

「ルット モイ」

パーティーシアがそう唱えるとパーティーシアの姿が10に分裂した。

「…！」

ウィザードの男は増えた目標に向かって炎の矢を所構わず叩き込む。

「リフレクション」

ウィザードの男とパーティーシアの間に障壁が発生し炎の矢を弾き返す。

そのまま炎の矢はウィザードの男に直撃した。

「ぐあああああああああ！…！」

「止めよ…3流のウィザードさん」

そう言つとパーティーシアは杖を掲げる。

「ニフィリティー！」

パーティーシアが唱えるとウィザードの男の中心に闇が出現した。

そのまま闇はウィザードの男を飲み込んでいく。

「どうかしら、虚無の味は？」

ウィザードの男は何も語ることなく闇へと消えていった。

「円月斬！」

丸く弧の字を描く様に長剣がバーギルの周りを奔る。

槍使いの槍は真つ二つに斬れて地面へと突き刺さった。

「おおおおお！」

ズバッ！！

そのまま一閃。

バーギルは槍使いの体を切り払った。

「余計な手間をかけさせやがって…さあ、続きだ、パーティーシア」

「残念ねバーギル、まだみたいよ」

そう言つとパーティーシアは杖を振るつ。

すると一体何人いるのだろうか…とんでもない量の軍勢が2人を

取り囲んでいた。

「たかだか2人に…大層なもてなしだな…！」

「それもウィザードばかり…これはどうやら私の追っ手ね」

パーティーシアはクルリと周りを眺め、

「私はまだ死ぬわけにはいかない…やるべきことがあるから…」

「やるべきこと…？」

「ええ…30秒、あの軍勢に耐えられるかしら？バーギル」

「たかが30秒で何が起こせる、パーティーシア」

「あら、嫌だ…1年前のこと、もうお忘れ？」

ふふつと笑みを零し

「この天才ウィザード、パーティーシアの本気…見せてあげるわ」

「ちっ…嫌なこと思い出させてくれる…30秒だな！」

「ええ！」

そう言つとパーティーシアは杖を天高く掲げる。

「Je le fais d'apr?s un contrat
et c'est l'ess

rit mauvais

(契約に従いし魔性の住人よ)…」

「おおおおお!!」

パーティーシアが詠唱を開始したと同時にバーギルは地を蹴った。

刹那、何百本という炎の矢がバーギルを襲う。

「なめる…ああああああ!!」

必要最低限の炎だけを避け前へ前へと突進するバーギル。

「Je n'apporte pas pluie de la
lumi?re d'apr?s un contrat du
tu ici maintenant

(汝の契約に従い今ここに光の雨をもたらさん)…」

バーギルの剣は障壁によって弾かれる。

その隙を縫うかのようにまた、何百という炎の矢がバーギルを襲う。

「があああああああ!!」

ウィザードの軍勢が一斉にパーティーシアへと杖を向ける。

「させるかあ!!」

炎に包まれながらバーギルは叫んだ。

「蛇波斬！」

凄まじい勢いで唸りを上げる長剣。

それとともにバーギルを包んでいた炎がウィザードの軍勢へと押し返される。

しかし、それでも削ったのは100分の1にも満たなかった。

パーティーシアに向けて放たれる何百という炎の矢。

バーギルは無我夢中でパーティーシアの前に立った。

数百の炎に焼かれるバーギル。

「Je retiens chaos et un tourbillon de la lumi?re dans cette mainetne friends pas maintenant ouvert! (混沌と光の渦をこの手に宿し、今、弾けん!)」

かつと見開くパーティーシアの目。

その目は右側が銀色に左側が赤色に染まっていた。

「エクスプロージョン！」

詠唱を唱え終わった直後、パーティーシアを中心に半径10kmが光の爆発に包まれた。

唱えられたエクスプロージョンはウィザードたちの障壁を容易く打ち砕き、粉碎していった。

「……………」

何分くらい気を失っていたのだろう。

バーギルは目を覚ました。

「あら、目、覚めた？」

バーギルの体に風穴や火傷のあとは無かった。

「治癒の魔法をかけたわ」

「…ふん」

「なんか、興が削がれちゃったわね」

「…貴様のやるべきことは…何だ？」

バーギルは仰向けのままパーティーシアに問いかける。

「…終端の阻止…よ」

「…言ってる意味がわからん」

「はあ、これだからコモナーは学が無くって嫌なのよね」

そう言うとパティーシアはコートを翻し、

「ついて来る？追われる立場同士…」

「…何を馬鹿な…」

「いつでも好きな時に私の命が狙えるわよ？」

「……………」

少し考え込んだ後バーギルはむくりと起き上がった。

「勘違いするなよ、あくまで決着をつけるためだ、つるむ訳じゃない」

「あゝら、怖いこと、いいんじゃない？貴方にも今に分かるわ…この世の真実…ってというのがね…」

そう言うとパティーシアとバーギルは荒野を後にした。

- 某所 -

「パティーシアの殺害に失敗」

報告にドン！と机に拳が叩きつけられる。

「おのれ、パティーシアめ…あれだけの数のウィザードを葬るとは…！」

「バークレイ様…どうやら赤髪のバールがパティーシアについて模様です」

「ふん、コモナーの1人くらいどうとでもなる…が、」

バークレイはぎりつと歯を噛み締め、

「パティーシア…あの女は何としても殺さねばならん…我らが『神』のためにもな…！」

「奴の体内にある『無限の核』…エターナルコア何としても奪い取れ…！」

バークレイは漆黒のコートをバツとたたなびかせ、

「いいか！奴がかの地に向かう前に叩くのだ！どんな手を使っても構わん…！」

「はっ、全てはバークレイ様のために！」

そういつとバークレイの部下はスッと姿を消した。

ルシファー本部へ

・ゲルステイン帝国・

1年前戦争によって滅ぼされかけたがパティーシアによって救われた国である。

よってパティーシアはこの国ではちょっとした英雄扱いだ。

ただし、その英雄扱いはあくまで一般市民に留まる。

パティーシアがこの国のウィザード組織「ルシファー」を独断で抜けたからだ。

「おう、パティーシア」

ぶっきらぼうにバーギルが言う。

「なに？」

「お前、なんでこの国の組織裏切ったんだ」

「真実の探求の為…」

「真実の探求…？前言ってた終端の阻止だからってやつか・・・」

「そうよ、私がやらなくちゃいけないことが見つかった、だからや

めたの」

そう言うつとパティーシアはバーギルの方を振り返り、

「この際だから教えてあげるわ、この国のウィザード組織『ルシファール』について」

「あのなあ、俺は貴様とつるんでる訳じゃないんだ、内輪もめの話なら遠慮するぜ」

「黙って聞きなさい、ルシファールの存在意義は『神』の光臨にあるわ」

「…神？はっ、いかにもウィザードの連中が考えそうな宗教的なことだな」

ぴつとパティーシアは人差し指をバーギルの口元に添える。

「彼らの神、名はその組織名の通り『ルシファール』、そしてその復活に必要なのが…」

「『エターナルコア』無限の核』よ」

パティーシアは左手を自分の胸に持っていき、

「『エターナルコア』は私の中に存在しているわ」

「…はあ？」

「私は生まれ持って作られたウィザード『サタン』なのよ」

「作られた・・・？」

「そう、私に親はいない、試験管の中で生まれ生まれながらにしてルシファールの一員だった」

「そして神『ルシファール』復活のための道具なのよ」

バーギルは面を喰らった顔をした。

そして同時に納得もした。

パーティーシアの底の無い魔力に…。

「で、貴様は自分の命欲しさに組織を逃げ出したのか」

そんなバーギルの問いにパーティーシアは右人差し指をちゅちゅちと振り、

「神様が生まれたらまず何をすると思う？」

「あん？」

「世界の構築…」

「なんだって？」

「つまり今ある世界を壊して新たな自分の世界を創り上げるってことよ」

冗談にしては笑えない。

パティーシアの顔は至って冷静に、

「だから『ルシファー』が光臨したら真っ先にコモナーが滅ぶでしょうね」

「なんでだよ？」

「知恵も無い、魔法も使えない、品性も無い、とバークレイたちは考えてるわ」

「バークレイ・・・？」

「ルシファーの最高幹部よ」

「バークレイはコモナーを虫けら同然だと思ってる…同じ人間なのにね」

それを聞いてバーギルは虫唾が走る思いをした。

「虫けらだと…ふざけやがって！」

「それでバークレイは私の体内からエターナルコアを取り出して神『ルシファー』を光臨させ

コモナーを全滅させようと考えてるのよ」

「何でだよ？神とやらが復活したら今ある世界を壊すんだろ？
だったら自分たちだって危ないじゃないか」

「そこまでは知らないわよ、何かあるんでしょう、ウィザードだけが生き残る方法が」

そこまで言ってパーティーシアは身を翻した。

「じゃあなんで貴様はこの国に帰ってきた？」

「復活の地を知るためよ」

「復活の地？」

「神『ルシファー』を光臨させるのに必要な場所のこと、同時にその地を封印すれば神の

光臨は避けられるってワケ」

「それどこに行けばわかるんだよ？」

「ルシファー本部よ」

「ああ！？貴様正気か！わざわざ殺されに行くのかよ！？」

「あら、私は死ぬ気なんて更々無いわよ」

「けっ！俺は知らねえぞ、そんな危ない組織に関わっていられるか！」

「あ、そ、いいわよ別に貴方は来なくても」

そう言つとパーティーシアはひらひらと掌を振って歩いていった。

・ルシファー本部前・

（警備は3人…なんだ、意外と少ないわね…）

「s o m m e i l（眠り）」

パーティーシアがそう呟くと警備の3人は次々と眠りに落ちていった。

・ゲルステイン帝国・宿屋・

部屋の中をバーギルはイライラした面持ちで右往左往していた。

「…パーティーシアを殺すのは俺だ…ちっ」

・ルシファー本部内作戦参謀室・

「えーと…復活の地、復活の地…と」

そう言いながら慣れた手つきでコンソールを動かすパーティーシア。

「出た、ビンゴ」

空中に立体的に文字が浮かび上がる。

『復活の地…エデンは東にあり』

（東って…これだけの情報しかないの？）

「地図検索、エデン」

『該当情報なし…検索エラー』

その時、後ろから声がかかった。

「久しい顔だな、パティーシア、探し物は見つかったか？」

パティーシアは、はっとして後ろを振り返る。

「ロンド…」

ロンドと言われた黒髪の男はそつと眼鏡を持ち上げた。

「それにしても贗が自ら来るとはな、君はもっと賢い女性だと思っ
たんだがな『サタン』？」

「私と一戦交えようっていうの？『ウリエル』」

「そりゃ君を殺して無限の核を抜き出せばバークレイ様もお喜びに
なるからな」

くくつとロンドは喉を鳴らし、

「だが君とサシで戦うなんて無謀なことはいさ、出てこいお前達」

ロンドが合図を送ると5人、そろそろとウィザードが出てきた。

「さあ、殺させておくれ『サタン』」

そう言つてロンドが杖を抜く、同時に他の5人も。

と、その時、更に後ろの方から声がした。

「悪いがそいつを殺すのは俺の役目でね、お前らへボウィザードなんかにはやくれてやらないよ」

声の主はバーギルだった。

「バーギル！来ちゃダメよ！雑魚5人はともかくロンドは他のウィザードと同じ扱いしちゃダメ！」

「珍しく慌ててるじゃないか、パティーシア」

そう言いながら長剣を抜くバーギル。

「邪魔なコモナーだ…下等生物の分際で、このルシファーまで来るとは…ね」

「んだところら、俺はパティーシアとの決着をつける前にあいつが勝手にくれたばるような真似をさせないだけだ」

「ファイアボール」

バーギルの言葉を完全に無視してロンドは魔法を唱えた。

大きな大きな炎の塊がロンドの前に広がっていく。

（んだ！？これがファイアボールの大きさかよ！！！？）

「死ね、コモナー」

ボンツと音を立てバーギル目指して炎の塊が飛んでいく。

（ちいい…避けきれねえ…！！！）

「ムーブメント！」

パーティーシアの声が跳ね上がる。

同時にバーギルの体は瞬時に1人のウィザードの横に移動した。

「へっ…余所見してんじゃねえよ！」

ズバッ！

一閃。

ウィザードの1人が床に崩れ落ちる。

と、同時に壁に炎の塊がぶつかる。

炎の塊は壁の沸点を楽に越えて壁を蒸発させた。

ロンドはパーティーシアを睨みつけた。

「信じがたいな…君ほどのウィザードがコモナー1人助けるなんて」

「助ける？気のせいじゃないの、ロンド、私はバーギルと決着をつけてない、それだけよ」

「決着？ウィザードとコモナーが戦って決着一つ、つけられないのか、こりゃ傑作だ！」

「何言ってるのよ、今そのウィザードの1人がそのコモナーにやられたじゃない」

「それは君が『座標移動』を使って不意打ちに成功したからだろう？」

ロンドは眼鏡を上げなおすと、再び杖をかざす。

「どうやら君を買いかぶっていたようだな、君1人殺すのなら僕1人で十分だ」

そう言つとロンドは詠唱を始めた。

「C'est intervalle de l'espace
uncourant de temps (時の流れよ、空間の狭
間よ)」

地面が激しく揺れ始める。

「ちっ、おいパーティーシア！奴は何おっばじめる気だ！？」

「空間湾曲…どうやら自分自身と私を異次元に移動させる気ね」

「Un espace-temps ne vous tente
pas dans la surface courbe ?
? . . . est maintenant nouveau
(今時空は一つとなりて新たな曲面へと誘わん)」

「丁度良いわ、私はロンドをなんとかするからあなたは残りの雑魚を頼むわね」

「勝手ほざいてんじゃねえぞ！」

「決着…つきたいんでしょ？」

そうパーティーシアが言ったところでロンドの詠唱が完成した。

「コーベスパス」

ぐにやりとロンドとパーティーシアが円を描いて曲がり消えてった。

「ちっ…くたばんじゃねえぞ！」

バーギルは長剣を構えなおす。

残った4人のウィザードに向けて。

「俺も…決着をつけるまでは死なねえ！」

バーギルは吼えた。

- ??? -

「ふふふ…どうだい？僕の異次元空間は」

パティーシアとロンドの周りは何もなくなただ灰色の空間だけが広がっている。

「悪趣味ね」

パティーシアは肩を竦めるとそう言った。

「おや、お気に召さなくて残念だよ」

そう言つとロンドは杖を構える。

「ここが君の墓場となるのに…ね！」

そう言つと共にゴウ！と音を立てて炎の塊が杖の先端から迸った。

「グレイスバツクラー！」

パティーシアは咄嗟に唱える。

巨大な氷の盾がパティーシアの目の前に現れる。

炎と氷がぶつかり合い相殺し蒸気となって2人の間を飛び交った。

「驚いたかい！ここは僕の庭、ここでは僕は魔法の詠唱など必要ないんだよ！」

「くっ…」

「しかし流石だね、ここでは他のウィザードは力を制限される、それで僕のファイアボールと同等とは！」

「このくらい丁度いいハンデよ！フレーミア！」

音速の光がロンドに向かって飛ぶ。

しかしロンドは杖を傾げるだけで目の前に障壁を発生させた。

「！」

「見えるかい？リフレクションだよ」

「ムーブポイント！」

はね返った光を座標移動で避ける。

「ははっ、楽しいなあ同胞！ここでこの『ウリエル』ロンドとやりあえるのは君くらいさ『サタン』！」

「同胞なんて笑わせるわ！同じ試験管ベイビーってだけじゃないの！」

「同胞だろ！？『創られた者』同土潰しあう、バークレイ様もさぞお喜びになるだろう！」

「その減らず口…二度と叩けないようにしてあげるわ」

「君が死ぬからかい！？」

そう言つとロンドは杖を振る。

五角形の図形が空間に浮かび上がりそれぞれの頂点から光の弾が飛ぶ。

「ルット モイ…ムーブポイント」

パティシアの体が6つに別れ、そのうち1つだけが座標移動で空間を転移する。

光の弾は5つの分身に当たり閃光と共に破裂した。

「C'est un ? clat de lumi ? re ent
err ? dans le tonnerre moulu po
ur donner le jugement ? (審判を下す雷
よ地に埋められし閃光よ)」

「Lame . . . je de la lumi ? re ne
d ? truis pas mainte nant d'en ne
mi (今、光の刃となりて我が敵を討ち滅ぼさん)」

「遅いよー！」

ロンドは振り向きざまファイアボールを3発連続で発射する。

「ピック フレミア！」

パーティーシアがファイアボールに向かって杖を振る。

地面から光の刃が無数に連なりファイアボールを砕きながらロンドへと迫る。

「ふん！」

しかしロンドはいとも簡単に座標移動で避ける。

「デイスパーション！」

パーティーシアが唱えたと同時に光の刃が無数の流星になって四散した。

「なっ！？」

流星の一つがまともにロンドの右胸に決まる。

「ぐはっ」

「詠唱破棄が出来るくらいで勝てると思ったのかしら？」

ロンドの右胸から血が止まらない。

「くそ…魔法に魔法を融合させるなんて…」

「止めよ、さよならロンド」

瞬間、空間が捻じ曲がった。

「今回は素直に負けを認めよう、だがこのまま無様に終わる僕じゃあない」

「空間湾曲……？これも詠唱破棄出来るっていうの……！」

「今度あいまみえる時があればそれが君の最後だよ、覚えておくが
いい」

ぐにやりと曲がる空間と消えていくロンドを見るパーティーシア。

「捨て台詞が3流ね、ロンド、でもいいわ覚えといてあげる」

空間が消滅するとそこにはズタボロに座りこけたバーギルと5人のウィザードの死体があった。

「……よう……奴は……？」

「逃げられたわ」

言いながらパーティーシアは治癒の魔法を詠唱した。

バーギルの体がみるみる癒されていく。

「行くわよ」

「行くあては見つかったのかよ？」

「東…とりあえずそれだけよ」

「東…か、メサイア共和国があるな」

「じゃ、とりあえずそこまで行きましょ」

そう言うたとすたとパーティーシアは歩き出した。

「あ」

突然バーギルの方に振り返るパーティーシア。

「なんだよ？」

「あ、ありがとう…来てくれて」

「あ！？な、なに言ってんだ貴様！忘れたのか！

貴様は俺が殺すんだ！それを横取りされなくなかったただけだ！」

「でも貴方が来てくれなかったら、私は多分殺されていたわ、

6対1、ましてやその内1人がロンドクラスだと他の5人の相手は出来ないもの」

「…ちっ…もうどうでもいいぜ、それよりメサイア共和国だろ」

「そうね」

そついうと漆黒のコートを翻し、またすたと歩き出す。

「ま…決着がつくまでは…守ってやらあ」

そうバーギルが小さな声で呟くとパティーシアを追って歩き出した。

エターナルコアの秘密

・メサイア共和国・

国民の数が20万を超える大陸第2位に位置する国である。

農産業が盛んで他国への輸出も行われている。

また、農産業をウィザードの魔法で行っているのも大きな特徴だ。

そのメサイア共和国の入り口にパティーシアとバーギルはいた。

「うーん…ひつさびさの大きな国ね」

そう言う大きな伸びをするパティーシア。

「ここでエデンの情報を集めるのか？」

腕を上げて伸びをしてるパティーシアにそうバーギルはたずねた。

「そうね…」

そうパティーシアが続きを言おうとしたところで

パティーシアの顔つきがげつと変わった。

バーギルがどうしたのかと尋ねようとすると、遠くからこちらへと近づいてくる足音が聞こえてくる。

近づいてくるのはポニーテールで黒髪の少女。

見た目14、5歳だろうか…

漆黒のマントを付けているところを見るとこの少女もウィザードのようだ。

「おねーさまー」

ばふつとパティーシアの胸に飛び込む少女。

「ク…クレシス…？な…なんでこんな所に！」

クレシスと言われた少女はパティーシアの胸に顔をこすりつけながら

「あら、お姉さま、私はここの魔法師営団1番隊隊長ですよ、お忘れですか？」

「う…迂闊だったわ…すっかり忘れて…た…っては…な…れ…な…さ…い…よー！」

ぐぐぐつとクレシスの頭を両手で離すパティーシア。

「い…いや…です…お姉さまと会った何年振りだと…思ってるんですか…」

ぐぐぐつとクレシスは頭に入れたまたパティーシアの胸へと持っていく。

「おい、パティーシア…こいつは誰だ？」

バーギルが呆気にとられながら話す。

その声にクレシスがギロツとバーギルを睨みつけた。

「お姉さま…？誰です？この野蛮そうなコモナーは…
仮にもお姉さまの名前を呼び捨てにしたようですけど…」

「あ…ああ、こいつはバーギル、赤髪のバーギル、聞いたことある
でしょ？」

「赤髪のバーギル？ああ、コモナーのくせに結構強いとかいう傭兵
ですね、で・も」

クレシスがパティーシアから離れバーギルへと近づいた。

「なんで貴方、お姉さまを呼び捨てに？たかがコモナー風情が」

「けっ、俺がパティーシアのことを何と呼ぼうが勝手だろうが」

ぷいっとバーギルはそっぽを向いた。

「いいえ、いけないわ、お姉さまに対しての侮辱…と捉えますよ」

「何といわれようと変えるつもりはない」

バーギルのその言葉にクレシスはひくひくとこめかみをぴくつか
せた。

「いいです、その腐った根性、死んで叩きなおして差し上げます！」

そう言つとクレシスは杖を抜く。

「テレポート」

クレシスはふっと消えるとバーギルの遥か頭上に姿を現した。

「ライティング！」

クレシスが杖をバーギルに振る。

雷がバーギルに落ちる。

その雷をバーギルは避ける。

「私のライティングを避けるとは…中々やりますわね、コモナー風情が…！」

「グラヴィオン」

「え？」

パーティーシアの詠唱が聞こえたと思うと空に飛んでいたクレシスが地面へと落ちた。

「きゃあ！」

そのクレシスをバーギルが両手で受け止める。

「な…は…離しなさい！コモナー風情が！お姉さまも何故とめるんです！」

「離しなさいったってこのまま落ちてたらお前死んでたろうが…」

「私があ程度の高さから落ちたくらいで死ぬものですか！いいから離しなさい！！」

クレシスはドンツと両手で思いつきりバーギルを突き放した。

「クレシス、こいつはとりあえず私の味方よ、やめなさい」

「えー！お姉さま、こんつなコモナーとお付き合い…げぶっ！」

クレシスの言葉が最後まで続く前にパティーシアのグーのパンチがクレシスの顔面に直撃した。

「私は味方だつて言ったの、誰がこんな奴と付き合ってるって？」

「けっ、俺の方がお断りだ」

「ふん、それは大変嬉しい言葉ね」

2人はにらみ合つてふんつと互いにそっぽを向いた。

「で、そいつは誰なんだよ？」

「クレシス・レイルモンド、私の1番弟子よ」

（ふむ…とりあえずお姉さまとこいつは憎からずも遠からず…と
いったところ…なら…）

「はじめまして、コモナーさん、私、クレシス・レイルモンド、1

4歳、お姉さまの1番弟子兼恋人です」

「だ…誰が恋人よ！」

パティーシアが怒鳴る。

「はあ？なんだ、変態か、お前」

「へ…変態…？」

ひくつと口が動くクレシス。

「あのねえ、バーギル！クレシスは私の1番弟子！それ以上でもそれ以下でもないの！」

「いやです、お姉さま、あんなに愛し合ったではありません…ぶべっ」

クレシスの台詞が最後まで続く前にまたもパティーシアのグーのパンチがクレシスの顔面に飛ぶ。

「さ、こんな子、放つという宿へ行くわよ、バーギル、その後情報収集」

「あ…ああ」

「ああ、お姉さまあ…ま、待って」

「じゃあ、お姉さまたちはルシファアの復活を阻止するためにエデンの情報を求めているんですね？」

「そういうこと、だからあなたに構ってる暇はないのよ」

どんつとクレシスは自身の胸を強く叩いて胸を張る。

「そういうことならお任せください、お姉さま！」

私が魔法師営団の方に情報を提供するよう働きかけます」

「ルシファアのデータベースにも無かった情報がーウィザードが知ってるわけではないと思うけどな」

バーギルが胸を張るクレシスに冷めた目線を向けて言い放つ。

その言葉にまたひくつとこめかみをひくつかせるクレシス。

「コモナー…あなたは一々、言葉が多いですね」

「本当のことだ」

「ふん、まあいいです、役に立つかどうか、そこに座って見てなさい」

そう言うつとクレシスはパティーシアの方に振り向き小さくお辞儀する。

「それではお姉さま、また後ほど…」

「テレポート」

そうクレシスが唱えるとふっとクレシスの姿が消えた。

「で…俺たちはどこから当たるんだ？」

バーギルが消えたクレシスの場所を見ながら呟いた。

「そうね、エデンの事だから…まず一般市民は知らないでしょうし…」

手を顎にあて、うーんと首を捻る。

「国王に、会ってみましょうか」

「はあ？貴様アホか、仮にも一国の国王がそう簡単に会うわけなからう」

呆氣にとられた顔をしたバーギルにちつつちつつと指を振るパティーシア。

「私を誰だと思ってるの、バーギル」

「アホ女」

「クレシスじゃないけど…口の減らない男ね…まあ、いいわ、付いて来なさい、すぐにわかるから」

そう言ってパティーシアとバーギルは城の方へと向かった。

・メサイア城・門前・

「はい」

門番に向かって軽く手を振るパーティーシア。

「パ…パーティーシア様！」

「お久しぶりです！」

門番の2人が慌てたように敬礼をする。

「おいおい…どうなってんだ、こりゃ」

「私、この国で前に農産に関する魔法の手解きをしたことがあるのよ」

パーティーシアはそう説明すると門番に

「メサイア国王はいるかしら？」

「国王様ですか、もちろんいらっしゃいます」

「会える？」

「暫くお待ちを…」

そう言って門番は足早に城の中へと入っていく。

5分後…

「お待たせしました、国王様がお会いになります、謁見の間へどうぞ」

「ありがとうございます、さ、行くわよ、バーギル」

「あ…ああ」

スタスタと歩き出すパティーシアに驚きを隠せない様子で付いていくバーギル。

2人は謁見の間へと入っていった。

メサイア国王、本名をグラガンドル・キューシャ・メサイアという。

御年65歳。

白髪に立派な白髭。

精悍な顔立ちは一国王としての威厳を十分に放っていた。

「お久しぶりです、グラガンドル国王閣下」

そついうと膝をつき、礼をするパティーシア。

「おお、パティーシア、久しいの、ルシファーに狙われていると聞いて心配しとったが…」

「お気遣い感謝いたしますわ」

「そなたはこの国の恩人じゃ、そう堅苦しい挨拶などいらんわい…」

で、用件はなんじゃな？」

「エデン…という地名をご存知ないかと」

「ふむ…エデン…か…」

グラガンドルの眉間に僅かにしわが寄る。

「確か『神』が光臨する土地…じゃったかな」

「その通りです」

「エデンはここメサイアより更に東の土地にある」

「東…というのは知っております」

「ふむ、もうちょっと詳しく話そうかの…」

「このメサイアより東へ120km…その遙か天空にエデンがある…」

「という言い伝えが家伝として残っている」

「天空…？」

「『神』が光臨する土地じゃて…普通にはない場所なんじゃろつな…」

「で…行く方法は…？」

「無い」

「…そうですね…いや、場所が分かったただけも有難かったです」

「エデンへと赴いて何をする気じゃ？」

「『神』を封印します」

凜とした眼差しでパティーシアは言った。

「『神』の封印にはエターナルコアが必要じゃ…それが意味するところを知って…言っておるのか？」

「はい、それが私に与えられた『運命』ならば…その覚悟は…もう出来ています」

「おい、どういう意味だ…？」

バーギルは会話の意味がよくわからず堪らず質問した。

「『神』は光臨するにしても封印するにしてもエターナルコアが必要不可欠なのよ」

「ああ？それって貴様が死ぬってことじゃねえのか！？」

「そうよ」

「そうよ…ってお前…」

「時間が惜しいわ…行くわよ、バーギル、国王閣下、失礼します」

「うむ…」

「お、おい…」

スタスタと歩いて謁見の間を出るパーティーシアを呆然と見つめるバーギル。

「その方、傭兵「赤髪のバーギル」じゃな？」

「！…は…はっ！」

グラガンドルに問われ思わず背筋を伸ばすバーギル。

「あの子は…本気じゃ…それまでの間、守ってやってくれぬか？」

「…ホントに封印したら、あいつは死ぬんですか？」

「…十中八九、逝くじやろうな…」

「……………」

ぎりつと歯をかみ締める音が謁見の間に広がった。

「…ルシファアは新しいエターナルコアを持つ試験管ベイビーを製造中と聞く…」

猶予もないのもまた事実なのじゃ…」

「そうだ！それが完成したらそいつを奪って封印すれば…！」

その案にグラガンドルは静かに首を横に振る。

「それはきつとあの子が許さんじゃろ…同じ試験管ベイビーとして利用されるための存在として

産まれるものが自分の代わりになるなど…優しいあの子には耐えられんのじゃ…」

「だからって！あいつが死んで、それで終わりなんてこと…あつてたまるか！…！」

「主の気持ちも分かる…があの子の覚悟は本物じゃ」

「……………」

くるつと国王に背を向けるバーギル。

「そんなこと…認めねえ…絶対に他の方法を探し出して見せる…」

国王様…俺はパーティーシアを死なせない…あいつを殺すことができるのは…俺だけなんですよ…

それ以外でのあいつの死なんて…俺は絶対に認めない…」

そう言うとバーギルは走ってパーティーシアを追いかけた。

もう一人のエターナルコア

・ルシファー・魔法実験棟第一施設・

バークレイとロンドは一つの試験管を眺めていた。

試験管の中にいるのは1人の女性。

金髪のロングヘアー。

見た目は17〜8歳くらいだろうか。

「見たまえ、『ウリエル』、これが新しいエターナルコア、『ミカエル』だ」

そう言っただけ、バークレイはニヤリと笑う。

「はっ、バークレイ様、これで『サタン』は用済み…いつ処分してもいいという訳ですね」

続いてロンドも笑う。

「そういうことだ…『ウリエル』よ、『ミカエル』を連れて『サタン』を殺せ」

カツと外に稲妻が走る。

「奴は今、メサイア共和国にいる、行け、『ウリエル』よ！」

そう言ってバークレイはロンドに命じた。

「はっ！」

「ぽぽっ…」という音がして試験管から泡が吹き出た。

・メサイア共和国・宿屋【紅の坂月】・

「お姉さま！有力情報、ゲットです！」

城から帰ってきたパーティーシアとバークレイをぱあっとクレシスが迎えた。

「お姉さま、エデンは東に120km、遙か天空にあり！です」

「あ、それ、もう知ってるわ」

ガーンという音を立ててクレシスの頭にタライが落ちてきた…よ
うな錯覚がした。

「ばっか」

続けて言われるバークレイの言葉にひくつとクレシスの口がゆがむ。

「コ…コモナー…あなたはいつもいつも一言、多いんです！」

「ファイアボール！」

クレシスの杖から炎が飛び出す。

バーギルは長剣を素早く下から切り上げ炎を切り裂いた。

「おい、小娘…俺は今、むしゃくしゃしてるんだよ…手加減できねえぞ…」

ギンツとバーギルはクレシスを睨みつけた。

「丁度いいです、あなたには今、ここでお仕置きをしてあげます！」

クレシスも杖を構えなおす。

と、そこでピクリとクレシスの動きが止まった。

（何…？この波動…お姉さまと…同レベルの人間が近づいてくる…？）

パーティーシアもバンツと勢いよく窓を開けた。

（この波動…まさか…）

「クレシス！逃げなさい！」

「お姉さま！この波動は…」

2人の会話についていけないバーギルはキョトンとしていた。

「バーギル！戦闘体勢！ロンドが来るわよ！」

「ロンド…？ルシファー内で戦ったあいつか…？」

「そうよ…『ウリエル』ロンド…でもそれだけじゃない…」

パーティーシアの言葉にクレシスが窓から身を乗り出す。

「お姉さまの波動を感じる…まさか…この感じは…まさか…」

「ええ、クレシス、どうやら…産まれたようね…もう一つのエターナルコアが…」

その言葉を聞いてバーギルも身を乗り出す。

（もう一つのエターナルコア…そいつを手に入れちまえば、こいつは死なずに…済む！）

バーギルはじつとパーティーシアを見つめた。

「な…なによ」

「いいか、お前は俺が殺すんだ、それまで絶対に死ぬなよ、パーティーシア」

バーギルはクレシスの方を見る。

「おい、小娘、一時休戦だ、敵を俺とお前とで迎え撃つ」

そんなバーギルにクレシスは少し驚いた顔をしたが、すぐにふふ

つと笑い、

「いいでしょう、さあ、お姉さま、ここは私たちに任せて、お姉さまはエデンへとお急ぎください」

「な…そんなこと、出来るわけ無いでしょう！」

「お姉さま、お姉さまは自分の1番弟子が、信用できないんですか？」

ぐいっと迫るクレシスの顔に一瞬たじろぎを見せるパティーシア。

「た…確かにあなたは強いわよ、だけどそれはあくまで普通のウィザードとして、試験管ベイビーと同格ってことは…ありえないわ」

「『サタン』であるお姉さまの1番弟子である私が『ウリエル』ごときに遅れをとるというのですか？」

「そうよ」

ふふんとクレシスは鼻で笑った。

「甘く見られたものですね、お姉さま、私はお姉さまの1番弟子なのです？」

もっと自分に自信を持つといいのです」

「でも…！」

「小娘の言つとおりだ、パティーシア…悪いが今回、貴様の出番は

ないぜ」

「バーギル！貴方まで…！」

そう、パーティーシアが叫んだときゴウツと風が吹いた。

「来ますわよ、コモナー、ぬかるんじゃありませんよ」

「けっ、小娘こそな」

風の後方から巨大な火炎弾が5発、迫ってきた。

「ミユラ！」

クレシスが叫ぶ。

同時に宿屋の前に巨大な障壁が姿を現した。

障壁にぶつかり、次々と火炎が粉碎される。

「ふん…あれはクレシス・レイルモンドか…」

ロイドは防がれたファイアボールを見ながら呟いた。

「いいか、『ミカエル』、俺があの小娘を殺す、お前は『サタン』を殺せ、必ずだ」

ロイドの後方でフードを被った金髪の女が小さく頷いた。

「ああ、それと邪魔なコモナーも1人いるはずだ、そいつも消せ」

「御意…」

金髪の女『ミカエル』はそういうとスッと姿を消した。

「フロテイン」

クレシスが唱えるとふわっとバーギルとクレシスの身体が浮かぶ。

「では、悪者退治と洒落こみますよ」

「ああ！」

びゅっとクレシスとバーギルがその場から飛んだ。

「ま、待ちなさい！あなたたち！！」

パティーシアが慌てて追いかける。

しかし、そうしようとした瞬間、びくつとした。

（何か…いる…）

ぱつと後ろを振り返る。

そこには金髪の女がいた。

（この波動…間違いない…この子だわ…）

「バークレイ様の命により…貴方を始末します…『サタン』」

そう言うと同時に杖を出す。

場の緊張感が一気に高まった。

「…！」

キキッと急にクレシスは立ち止まった。

（この波動…しまった…！）

「どうした？小娘」

急に空中で身動きが取れなくなったバーギルはクレシスの方へと振り返る。

「お姉さまの方からエターナルコアの波動が…！ロイドは陽動です
」！」

「なんだと…！？」

ぎりっ…と歯を食いしばる。

「コモナー、貴方を今からお姉さまの元へと飛ばします…ロイドは私が全力で止めますから、

お姉さまを助けてあげてください」

「小娘…お前…」

「ムーブポイント」

クレシスがバーギルに座標移動の魔法を唱えるとバーギルはすつと姿を消した。

（頼みましたよ…コモナー）

「フレイミア」

二つの閃光がぶつかり合い衝突する。

両者の力は全くの互角だった。

「貴方の名を…聞いておこうかしら…？」

「『ミカエル』…それが私のコードネームです…『サタン』」

そう言ったミカエルの頭上にふっとバーギルが現れた。

「おおおおー!!」

そのまま勢いに任せバーギルはミカエルに向かって長剣を振り下ろす。

「ミユラ…」

ガギイイイン!

バーギルの剣はミカエルの頭上で障壁に阻まれた。

「貴方が『ウリエル』の言っていた邪魔なコモナーですね…命により貴方も消去します」

「ちiiiiiii!」

すっと杖をバーギルに向ける。

「フレーミア!」

パティーシアの声が飛ぶ。

閃光がミカエルを包む。

ボウっという音と共に煙が立ち込める。

煙を切り裂いてミカエルがパティーシアに向かって突っ込む。

そのままミカエルはパティーシアの腹に蹴りを入れようとした・
が、

パティーシアはその瞬間、上に飛び、ミカエルの頭を掴み、上半身を捻るようにして後方へと着地した。

「ピック フレーミア」

ミカエルが唱える。

「がつ…！」

横の方からミカエルに接近していたバーギルの下から光の刃が連なりバーギルの身体を貫いた。

「バーギル！」

「こんな…ものお！」

グンツと足に力を入れてそのままミカエルに突っ込むバーギル。

「消えなさい、コモナー」

杖を構えたミカエルの横にムーブポイントでパティーシアが姿を現す。

そのままパティーシアはミカエルに飛びつき、2階の窓から飛び降りた。

「邪魔な…やはり貴方から消えてもらいます、『サタン』」

「『ミカエル』、貴方の産まれて来た意味…知ってるの？」

ぴくつと僅かにミカエルの眉が上がる。

「私は神・ルシファアの贄です、あなたと同じ」

「そうね…でも貴方が産まれて来たのはそれだけじゃないわ、必ず意味があるの」

「…意味？」

「そうよ…貴方は道具なんかじゃない、自分で生きる権利がある」

「…そんなもの、私にはありません、私は贄ですから」

ぱつと杖を振るミカエル。

「私には貴方や『ウリエル』のように本名も与えられていない…なぜなら、私は贄だから…！」

「フレーミア」

「ミュラ」

ミカエルの唱えた閃光がパーティィシアの障壁によって遮られる。

「『ミカエル』…なら、私が貴方に名前をあげるわ…だから、貴方は貴方の意思で、生きなさい！」

「……！」

ミカエルにかすかに驚きの表情が混じる。

「…そんなもの…必要ありません！」

「ファイアボール！」

「ムーブポイント！」

ミカエルの放った炎、いや、もはやマグマの塊だろう。
それを座標移動で避けるパティーシア。

「はあ…はあ…」

「くくく…よく持つ、クレシス・レイルモンド…」

「まだまだ、これからです！」

バツと杖をロイドに向けるクレシス。

「「ファイアボール」」

ガオオン！

二つの炎の塊がぶつかり、空中に火の粉が四散する。

「くつくつく…やるねえ、たかがウィザードがこの『ウリエル』と互角のファイアボールを打ち出すとは」

「死んでも貴方は、ここから通しません！」

「ああ、問題ないよ、僕が直接手を下さずとも『ミカエル』が君の愛する『サタン』を消すからね」

「…それも…事前策は打っています」

「例のコモナーか？くく…ただのウィザードならともかく相手はエターナルコアを内包した『ミカエル』だぞ？」

「そうですね…ただのコモナーなら、返り討ち…でしょうが…」

バツと杖をロンドに向けるクレシス。

「生憎、あのコモナー、ちょっと普通じゃないんですよ！、フレイミア…！」

閃光がロンドを襲う。

ロンドは飛翔し、それを避ける。

閃光と炎がぶつかり合い、激しい魔力同士が衝突した。

「「ファイアボール」」

パーティーシアとミカエル、2人のマグマが激しくぶつかり合う。

（…今だ！）

ミカエルの集中がパーティーシアに向いているその瞬間をバーギルは見逃さなかった。

2階から飛び降り、一気に間合いを詰め剣でミカエルの杖を叩き落とした。

「あ…！」

そのまま後ろからミカエルを羽交い絞めにする。

「よう、お前、ホントにそれでいいのか!？」

「な…なにがです…?」

「ホントにルシファー共の道具でいいのかって聞いてんだよ!」

「当たり前です、私はそのために産まれたのですよ!」

「この…馬鹿野郎が…!」

羽交い絞めを解いて、そのまま力任せにバーギルはミカエルを殴り飛ばした。

「どんな理由があろうとも、「道具」として産まれた奴なんてこの世にはいねえんだよ!」

一歩、一歩、バーギルはミカエルに近づく。

「ましてや、『運命』なんて言葉で片付けて、勝手にくたばるなんて、そんな都合のいい話、

許せるわけないだろうが!」

その言葉はミカエルではなくパティーシアに向けて放たれた言葉だった。

少なくともパティーシアにはそう聞こえた。

「……………バーギル」

「ミカエルさんよ…お前とパティーシア、2人で力を合わせて『神』とやらを封印すれば…」

この世は安泰、2人とも無事生き残るんじゃないのか？」

「な、なにを馬鹿な！私の悲願は『神』ルシファア様の光臨です！」

「それはお前の悲願じゃねえ、ロンドやバークレイ達の悲願だろうが！」

バーギルはぐつとミカエルの胸ぐらを掴み持ち上げる。

「言え！お前の本当にやりたいことはなんだ！？」

世界を救うことか！？それとも世界を壊すことか！？」

「わ…私は…私は…うわあああああああああああああああああああああ
ああ…！！！！！！！！」

キンツとミカエルの中央に無数の光が集まっていく。

「バーギル！離れて！」

パティーシアの叫びとほぼ同時にバーギルの体が吹っ飛んだ。

「はあ…はあ…邪魔だ…貴方たちは私の思考回路をおかしくする…」

ミカエルは頭を抑えながらよろよろと立ち上がる。

「次…次会うときは必ず消します…『サタン』、それに私を惑わせるコモナーも」

そういつとミカエルは光と共に姿を消した。

「！」

ロンドの後ろにミカエルの姿が現れた。

「『ミカエル』…『サタン』は消したのか？」

「すみません、『ウリエル』…私の思考回路が…おかしく…なってしまい…」

(…少し早く動きすぎたか…)

ロンドは杖を下げる。

「帰還するぞ『ミカエル』」

「はっ…」

そういつとロンドとミカエルは光に包まれてその場から姿を消した。

それを見てへなへなと地面に膝をつけるクレシス。

「はあ…はあ…流石に…創られし者を…相手にするのは…疲れますね…でも…」

クレシスは空を見上げる。

「あのコモナー…やっぱり…守ってくれたんですね…」

そついうとクレシスは眩しそうに目を細めて微笑んだ。

エデンへの扉

・ルシファー・魔法実験棟第一施設・

「くくく…はーっはっは…見よ、『ミカエル』！この『ウリエル』の姿を！完成だ、完成したのだ！

『サタン』を超える逸材が！遂に…！」

バークレイは試験管に眠るロンドの姿を見ながら高らかに笑った。

ミカエルはそんなロンドの姿を黙って見続ける。

背の片方に純白の翼、もう片方に漆黒の翼。

トレードマークであった眼鏡もしていなく、薄気味悪く光る銀色の目。

ロンドのその姿に前の面影はどこにも残っていなかった。

・エデン・直下地上・

パーティーシアとバーギル、そしてクレシスはエデンに「跳ぶ」方法もわからないままここへとやってきた。

クレシスは自分の部下を10名ほど従えて来ている。

クレシス曰く「私の優秀な部隊です、どこぞのコモナー1人より

もよつぽど頼りになりますよ」

と言つて無理やり同行させたのだ。

パティーシアは団体行動が苦手である。

基本的に自分のことは自分1人でなんとかしたい性格なのだ。

なのに事あるごとにクレシスとその部下たちは何かと世話を焼いてくる。

クレシスの部下たちにとって耳タコのように聞かされていた「お姉さま」の存在は正に神だった。

今もそれは例外ではなく瞳をキラキラさせながらパティーシアの言葉を聞こうとしている。

はあ…と溜め息をついてパティーシアは言葉を紡ぎだした。

「さて…この真上にエデンがあるんだけど…どうやって跳んでいけばいいのかしらね」

「パティーシア様！ムーブポイントでは跳べないんですか？」

「残念だけど、私のムーブポイントの距離は50km、それも1人の時でね、

あなたたち全員で跳んだら20kmくらいで打ち止めよ」

「なら、跳んだ直後にまたムーブポイントで更に上に上がれば…」

「エデンに着いたときに封印するだけの力が残ってなきゃ意味無い

でしょ、それに対外敵用シールドが
張られているかもしれないし」

「あ、そうですね…」

わいわいとパーティーシアたちが話し合ってるのを横目にバーギル
は辺りを散策する。

と、地面の一部に妙な違和感を感じた。

（草の色が…かすかに違う…？）

バーギルはぶちつと色の違う草を引っっこ抜く。

その下には薄っすら紫色に光る文字が見えた。

「…何だこれ？」

「どうしたんです？コモナー」

クレシスがバーギルに近づく。

「これ…何だ？」

「古代術式の文字の欠片ですわね…お姉さま！」

クレシスはパティーシアを呼ぶ。

「どうしたの？」

「これを」

「地面に古代術式の文字…？ちょっと待って、この辺一帯、燃やすわよ」

そう言つと軽く杖を振る。

瞬間、半径500mの草が燃え尽きた。

「流石ですわ！お姉さま」

「クレシスこそ、よく発見したわね」

「お姉さまのためならこのクレシス、何でも発見します」

「おい…見つけたのは俺…」

ぼつりとバーギルが呟くと物凄い形相でクレシスがバーギルを睨んだ。

その瞳に計り知れない殺意を込めて「私が発見したことにはしないと殺します」と。

「どれどれ…ん…」

地面に書かれた魔法陣を一通り眺め歩き、時には指先で触れる。

「どうやら大規模な転移型魔方陣のようね」

「ここにあるということは…」

「その可能性は、高いわ」

そのパティーシアの声に辺りがわつと騒ぐ。

「とりあえず今日一日かけてこれを解読、解読出来次第、エデンに跳ぶわよ」

「はい！」

- 夜 -

パティーシアはまだ魔方陣を丹念にチェックしている。

そこから数百メートル離れたところでバーギルとクレシスたちは待機していた。

「おい、小娘…」

「馴れ馴れしく呼ばないで貰いたいですね…何ですか？」

「パティーシアの奴をエデンに行かせて…本当にいいのか？」

ぴくつとクレシスの眉が上がる。

「私が何を言っても、もうお姉さまは聞きません、あの人はそういう人ですから」

一呼吸置き、右手を胸の前でぐつと構える。

「だから…その時が来るまで、私がお姉さまを守ります」

「俺は…そこまで割り切れねえな…」

バーギルは夜空を見上げる。

満天の星空が吸い込まれそうに辺りを包んでいた。

「あいつとは決着もつけてないし…俺以外のやつがあいつを殺すことも、

ましてや自分から死に向かうなんてのも我慢出来ねえ…」

「お姉さまは世界を救うために命を懸けるんです、その崇高な目的がわからないのですか？」

「わからねえよ、どんな事情があれ、自ら命を絶つなんて最低の行為だ」

「エターナルコアっていうのは諸刃の剣でしてね…埋め込んだ人間に膨大な魔力を与える代わりに人間としての寿命をほとんど捧げるものなんですよ」

「…なんだと…!？」

バーギルの顔に驚嘆の色が浮かぶ。

「だから、お姉さまは持つてあと1〜2年、それまでに出来ることは神を光臨させるか、神を封印するかのどちらかだけ」

「お姉さまは自分の人生に悔いを残さないために行動しているんです、それもわからないようなら…今すぐこの場を去りなさい、コモナー」

クレシスの凜とした眼差しがバーギルに突き刺さる。

「…ちっ…」

バーギルはクレシスの眼差しに耐えられないかのように「ごろんと背を向けて横になった。」

30分くらいの沈黙。

不意にクレシスが立ち上がった。

「みんな！戦闘準備を！何か来ます！！」

クレシスの部下たちがその言葉にざわめく。

バーギルも飛び起きて剣を手につった。

「パーティーシアは…？」

バーギルがパーティーシアの方を向く。

パーティーシアは魔方阵の中心で呪文を唱えている。

集中しているせいかバーギルやクレシスの声が届く様子もない。

「仕方ありません、私たちが食い止めますよ・・・！」

クレシスはそう言って杖を抜いた。

（魔力探索……南東、50kmほどですね…しかし何ですかこの波動…酷く深くて暗い…）

「クレシス様！敵はどこから来るんですか！？」

「南東です、今は50kmほど離れてますが…この魔力なら…」

一瞬でここに移動してくることも考えられますよ！」

「50kmを一瞬ってそんな…パーティーシア様と同じレベルの力…？」

部下たちに動揺が広がる。

「ミカエルか…？」

バーギルが剣を構えたまま呟く。

「いえ、この波動はエターナルコアではありませんね…ただそれに匹敵するくらい強い…！」

その言葉と同時にクレシスに緊張の色が走る。

「どうした？」

「私の魔力探索に気付かれました・・・！来ますよ…！」

そう言った瞬間、遙か南東から巨大な閃光が走る。

閃光はクレシスを狙っていた。

（大きい…ミユラじゃダメ…！）

「ムーブポイント！」

クレシスは上空へ転移して閃光を避ける。

…が、閃光は突如あり得ない方向に曲がりクレシスから逸れた。

「しまった…！私を狙ったと見せかけて…本当の狙いは…！！」

クレシスの目に映るのはパティーシアの姿。

「全隊員！お姉さまの前に防御壁を展開！！急ぎなさい！」

「はい！」

「ミュー!!」

10人分の防御壁がパーティシアの前に展開される。

ガギイイイイイイイイイイ...!!

次々と防御壁が破られ閃光は突き進む。

あと一枚、防御壁を残したところで閃光は辛くも消え去った。

一同が安堵した瞬間、クレシスの部下の1人が吹っ飛ぶ。

「あれほどのフリーミアの後にムーブポイント……？」

クレシスが驚きを隠せないように吹っ飛んだ部下の方を見た。

そこには異形の姿をしたものがいた。

「何ですか……あれ……」

純白の翼と漆黒の翼。

銀の瞳を宿す『そいつ』はクレシスの方を見て残忍な笑いを浮かべる。

「久しいな……小娘」

「その声…まさか、『ウリエル』…？」

辺りの部下たちがその言葉にぎよつとして距離を取る。

「くくく…そのまさか、だ、僕は人間を超えたんだよ」

「ルシファーがまた趣味の悪い実験をしはじめたんですね」

「趣味が悪い？崇高だと言って貰いたいな」

そう言つとロンドは手を振りかざした。

風がはじけ飛ぶ。

クレシスはまともに目を開けていられなかった。

（何です…詠唱していないのに…？）

「詠唱など必要なくなったのだよ」

ロンドはクレシスの背後に回りこんでいた。

「…心まで読むなんて、悪趣味なことこの上ないですよ」

「…ふん」

ロンドはすつと手をクレシスに向ける。

刹那、ドン！という破壊音と共にクレシスが吹っ飛んだ。

空中できりもみしながらなんとか途中で踏みとどまる。

「今ので死なないのも凄いものだ、どうだ小娘、『サタン』の部下などやめてルシファーに來ないか？」

「…冗談…言わないで貰いたいですね！フレーミアー！」

閃光がロンドに向かって飛ぶ。

ロンドは避ける素振りも見せない。

ロンドに当たる直前、閃光は八方に弾けて消滅した。

「くくく…目くらましにしかならんな」

ロンドの笑いにクレシスも微笑みを持って返す。

「元よりそのつもりですから」

「何？」

ロンドの背後に飛び掛っていたのはバーギル。

剣を渾身の力で振り下ろす。

ズドッ！

脳天に直撃したはずの剣はそこで止まっていた。

（…刺さらねえ…だとお…！？）

バーギルはなおも力を込める。

「何を企んだかと思えば、今更コモナー1人の力でどうにかなる僕だと思ったのか？」

ロンドはそう言つとバーギルの腕を掴み、

蟻を摘むような感じで肘を摘む。

ボキィ！と嫌な音がした。

「ぐあああああああああ！！」

「コモナー！」

クレシスが叫ぶ。

「止めだ」

そう言つて落ちていくバーギルに手を突き出すロンド。

ズオツ！と閃光が放たれた。

「誰か！ムーブポイントを！！」

全員がバーギルに杖を向ける。

「ダメです…間に合いません…！」

「コモナー！」

全員がバーギルの死を覚悟した瞬間、バーギルの体は座標転移した。

「!？」

「ムーブポイント！？誰がやったんです？」

咄嗟に地面の方を見るクレシス。

地面にはバーギルを抱きかかえるミカエルの姿があった。

邪神復活（前書き）

続き物の小説でルビ振るのってどうやるんですか（^ー^・）
タグが受け付けなかったよー（´・`・´・`）
神と書いてルシファーと読むと良いです。

邪神復活

バーギルを両手で抱え、ミカエルが立っていた。

「…それは何のつもりだ？ミカエル」

ロンドが問う。

「今、この者たちを消去するのは得策ではありません、『サタン』にエデンへの入り口を

開いてもらい、神の降臨を速やかに行うのが我々の仕事のはずです、それに…」

と、続く言葉をミカエルは止めた。

このコモナーを殺してはいけない、と自分の思考回路が命じている…と。

しかしロンドはミカエルの思考を読める。

ミカエルの思考を読んだロンドは怒りで顔面中の血管が浮き出した。

「ミカエル！貴様、ルシファーに仇なすか！」

ぶわつと両翼が開き両手を突き出す。

黒い黒い、ロンドの心の塊のようなどす黒い炎が掌に集まる。

「裏切り者には制裁を！エターナルコアなどもう必要ない！！
この僕がバークレイ様の傍にいる限り！！」

暗黒の炎がミカエルに向かって発射された。

その炎は触れてもいないものを燃やし、蒸発させるほどの力を持っていた。

だがミカエルは冷静にバーギルを降ろし、杖を炎へと向ける。

「ミュラ」

巨大な障壁が姿を現し、炎と衝突する。

黒い炎の塊は100以上の細かな粒子に分断され地面に降り注いだ。

「では…互いのために戦うしかないですね…『ウリエル』」

ミカエルは既にロンドの背後へと回っている。

「フレーミア」

詠唱の声に反応してロンドが手を振り払う。

巨大な閃光とロンドの振り払った手がぶつかり合う。

「ぐ…ぐぐつぐつぐぐ…！！」

「ディスパーション」

ドドドド…ン…！

ロンドの手に当たっていた閃光が四散し、流星となり横からロンドを襲った。

「凄い…これが…エターナルコアの戦い方…ですか…」

クレシスは驚嘆していた。

自分の尊敬する人と同じ戦いをする者に。

それはクレシスの部下たちも同様だった。

濛々と噴き上げる煙幕からロンドの腕がミカエルに向かって伸びる。

ミカエルは支点だけをずらし、その腕を避ける。

そのまま杖を腕に押し当て詠唱を行う

「ファイアーボール」

零距离でマグマがロンドの腕を直撃した。

…が、ロンドは怯まない。

ドロドロに融けた腕はそのままに半身を捻り、ミカエルの体に蹴りを加える。

「……！」

エターナルコアを内包するパーティーシアやミカエルは何も唱えてなくても

強力な「魔法障壁」が絶えず体を守っている。

そのことが幸いした。

吹き飛ばされ、脇腹に痺れを感じながらもミカエルは空中で静止する。

「とんでもない力ですね…『ウリエル』…」

「僕の方こそ褒めてやろう、ミカエル…この姿になった僕にここまですダメージを与えるんだからな、流石はエターナルコアと言った所か」

「だが、それももう終わる」

ロンドが力を込める。

大気が震えて、世界全体が脅えるような魔力がロンドの中心に渦巻いた。

「僕の本気を受け止める覚悟があるか…？」

ニヤリと笑い、ロンドが残った片手を突き出す。

「容易い挑発ですね、『ウリエル』、そのような事を私が受け入れるとでも…？」

「よく、位置関係を見てものを言っただな、ミカエル、後ろを見
てみる」

ミカエルはロンドの言葉にちらりとだけ振り返る。

そこには気絶したままのバーギルがいた。

「魔力のないコモナーの居場所にまで気が回らなかったなあ、どう
する？」

こいつを避ければそのコモナーが消滅するぞ？死んで欲しくない
んだよなあ！？」

ミカエルは杖を構えた。

「ならば…本気の一撃とやら、受け止めるのみです…！」

「その喧嘩、ちょっと混ぜてもらっわよ」

転移方陣の方から声がした。

さっきまで何にも目をくれず呪文を詠唱し続けていたパティーシアが放った台詞だった。

地面の方陣の輝きが数倍に膨れ上がっている。

「『サタン』…やはり邪魔をするか…！」

ギリギリと歯を食い縛り、パティーシアを睨みつけるロンド。

そしてパティーシアの心を読んだロンドは躊躇なく手をパティーシアに向ける。

「ちょっと遅い！」

パティーシアが杖を頭上に掲げた瞬間、辺り一帯が紫色の光に包まれた。

「くっ…くっは、どこだ!？」

ロンドは目の眩みを懸命に振りほどくと辺りを見回す。

草もない、土もない、あるのは水、そしてその水の上に数個の魔方阵が浮き出ていた。

「ここが、エデンよ」

ロンドの頭上からパティーシアの声がした。

咄嗟に上を見上げるロンド、既に漆黒の翼が攻撃態勢に入っていた。

だが、右から伝わるマグマの衝撃がロンドの翼を鈍らせる。

ミカエルが放ったファイアーボールだった。

「サンダーボール！」

続けざまにパティーシアの雷がロンドに走りぬける。

「が…ああ…」

ロンドはそのまま水の上の魔方阵へと落ちる。

魔方阵は床としての機能をしているのかロンドが水に落水するころとはなかった。

「転移させたのは私たちだけ、心置きなく戦えるわよ、ロンド」

そう言ってパティーシアはロンドを見下した。

「き…さ、まらあ…よくも…人間を超えたこの…僕を…地べたに這い蹲らせてくれたなあ…」

怒りにわなわなと震えるロンド。

「おあいにく様ですが…」

「私たちも、ただの人間じゃあないのよね」

と言い放つは2人のエターナルコア。

ロンドの怒りは沸点を超え、叫びにならない叫びを上げる。

片方が白かった翼が次第に黒く、黒く染まっていく。

水の上にある魔方陣が次々と消えていった。

「ここは…どこ…だ」

右腕が変な方向に曲がっている。

どうやらやつの攻撃で折れたらしい。

目を覚ましたバーギルがいたのはどこかの聖堂らしき場所だった。

そこにあるのは一本の剣。

「俺の獲物は見当たらないし…こいつで我慢しておくか…」

そう言うとバーギルは左手で剣の柄を握る。

と、剣の柄の先端の宝玉から光が漏れた。

「なん…だぁ…!？」

エデンにいたパーティーシアたちもその光を確認する。

「なに…？」

「『サタン』、あそこから不思議な波動が…」

「あそこが…ひょっとして神の祭られている場所？」

「喋っている暇があるのかあ…！」

ロンドが一足飛びでパティーシアに襲い掛かった。

もうロンドの目にはパティーシアとミカエル以外映っていない。

漆黒の翼で何度も何度もパティーシアを防御している腕ごと叩く。

「…の…！」

ロンドの翼とパティーシアの魔法障壁がぶつかる度に、大気が振るえた。

「フレーミア！」

ミカエルから閃光が放たれる。

ロンドはその場で回転し、もう片方の翼で閃光を打ち返した。

「！」

その時、信じられないスピードで光の上がった方向から迫った何かが閃光を弾く。

「よお」

バーギルだった。

見たことも無い剣を持ち、しかも空中に浮いている。

いや、剣からフィールドが形成され、それを足場として利用しているようにパーティーシアには見えた。

「バーギル…どうしてここに…それにその剣は…？」

「あ、知らねえよ、気付いたら神殿みたいなもんの中にいた、で、こいつはそこにあったんでかっぱらった」

「私のフレイミアを簡単に弾くなんて…何で出来てるんです…その剣」

「それも知らねえ、分かってるのはこいつを掴んだ瞬間にこいつの使い方を理解したってことだけだ」

ガギイイイイイン！

話しは漆黒の翼によって中断された。

しかし、バーギルの剣は翼の威力を持ってしてもビクともしなかった。

「で…だ、反撃開始だぜ…『ウリエル』さんよ」

ロンドは肩を震わせ笑った。

「くくくくくく…反撃開始？笑わせる、終わりなんだよ、もう、お前たちは」

「やってみなきゃわかんねえだろうが、このタコ！」

「分かるさ！お前は自分が何を持っているのか分かっているのか！？」

ロンドは剣を指差す。

「さあ、出番だよ、ミカエル！」

そう言うつとロンドの指先から光が照射されバーギルの剣の宝玉を経由してミカエルに当たる。

「あああああああああああああああああああああああ
ああああ！！！！」

ミカエルは絶叫した。

己の中に黒い意識が高まる。

「何か」がミカエルの中から突き破るような衝動に襲われた。

刹那、ミカエルの背中が裂け、黒い光が天に伸びた。

黒い光は天に昇った後、エデンに降り注ぎ、禍々しくも神々しくも見えた。

「さあ…神の降臨だ…」

ロンドは黒い翼を広げそう呟いた。

封神の劔

『神』は6枚の黒い翼を纏い、銀色の瞳を輝かせ、邪悪な暗黒の光とともに

エデンの中心へと降りる。

パティーシアとロンドは神の姿に確かにロンドの今の姿を重ねた。

ロンドは喜びに打ち震えながら神の元へと急ぐ。

「神よ！」

「余を…復活させたのは…貴様が…？」

「そうです！我らルシファアの働きによって、貴方様を目覚めさせることが出来たのです！」

「そうか…それはご苦労だった…」

神は左手をロンドの頭へと乗せた。

「勿体なき…お言葉…」

「だが、これで貴様も用済み…というわけだ」

「は…？」

ロンドが疑問を口にしようとした瞬間、凄まじい電撃がロンドを襲う。

「ガ…ハア…！…な…ぜ…？」

神はニタリと笑うと更に電撃をお見舞いする。

薄れ行く意識の中、ロンドが聞いた神の台詞はこうだ。

「余が望むは全ての無、人間など1人もいらぬ、
余を復活させて何を企んだのかは知らぬが、安心しろ、全ての動
植物を現世より消してやろう」

神の台詞が全て終わる前にロンドの意識は無くなっていた。

「くくく…余の姿を真似したところで、所詮、人間か」

ボロ雑巾を投げ捨てるかのようにロンドは神によって放られる。

「あー、すごい」

バーギルは震えながら笑っていた。

「バーギル？」

「やつは敵つてのはああいうクソみてえな野郎じゃねえとスッキリしねえよ、

ミカエルのように純真に縛りつけたような敵じゃなくてよ、己の絶対的力を誇示して他人の消滅を願う、そんなクソ野郎が神だよ」

バーギルは左腕で剣を構える。

「パティーシア…ミカエルを治してやれ、その間俺が時間を稼いでやる」

「本気で言ってるの…？見たでしょ、今のあいつのデタラメな強さ…」

「本気も本気、あのクソ野郎をぶった切りやあ、全ては終わるんだ、終わらせてやるよ！」

バーギルは飛んだ。

音速をも超えるスピードで剣を振り下ろす。

ガギイイイイイイイイイイイン！！

神が右手を出し、その剣を止めた。

「ほう…貴様、封神の劔を使いこなせるのか」

神が右手から雷を放つ。

雷は劔の宝玉に残さず吸い込まれた。

「おおおおおおおおおおおおお！」

ぐるりと反転し、その勢いのままバーギルは神の横腹に劔を叩きつける。

神に劔が当たった直後、宝玉が光り輝き、劔の先から先ほどの雷が迸り神を襲った。

パーティーシアは懸命にミカエルへと治癒魔法をかけていた。

並の人間なら即死であろうその傷は少しずつ、少しずつ塞がっていく。

「皮肉なもの…エターナルコアであることが、こんな形で役立つなんて」

パーティーシアはミカエルの傷口から僅かに見えるエターナルコアの核の部分を見ながら呟いた。

パティーシアはただ治癒魔法をかけているわけじゃない、
自らのエターナルコアの魔力もミカエルに連結させていた。

同じ波動を持つもの同士だから出来る治癒の方法。

「目覚めるなら早くなさい、ミカエル…いくら変な剣持ってるから
ってバーギルの不利に変わりは無いんだから…」

神の放つ魔法は封神の剣に吸い込まれる。

封神の剣は神の魔力を吸い取り、バーギルにそのままの力を与えた。

「全く厄介な剣だな…その剣は…」

雷球を次々と発射させながら神は言う。

「世界に一つだけの封神具、余の復活とその使い手が現れるのが同時とは…運命を感じるぞ、人間」

「知ったこっちゃねえよ、クソ神様よ！」

雷球を吸収し、時には避け、時には斬り、バーギルは神へと接近する。

「1000年前に余をその劔に封じたのも貴様のような赤髪の男だったなあ！」

バーギルの太刀筋を避けながら神は叫ぶ。

「嬉しいよ！子孫とはいえ、直接恨みを晴らせるのだから！！」

神は6枚の翼を展開させ、その羽先をバーギルに飛ばす。

一度に500以上の攻撃がバーギルを襲った。

「おおおおおおおおおおおお！！」

バーギルは吸収した雷球のエネルギーを拡散して放つ。

8割の羽先が消滅したが、2割はそのままバーギルへと突き刺さった。

「がはっ……！！」

「余の最大の敵は貴様というわけだ、人間」

そう言つて神はバーギルを指差した。

ぺっと血の塊を吐き出し、バーギルは神を睨む。

「嬉しくないね、俺にとつての最大の敵ってやつあ、もう決まってるんでな」

バーギルは剣を構えなおす。

「ぜってえ、テメエなんかより強いぜ、あのクソ女は」

そう言つてバーギルは笑つた。

「女…？あそこにいる人間か…確かに他の人間とは比べ物にならない波動を感じるが、

所詮人間のレベル、余の敵ではない」

ずっとバーギルに指された指をパティーシアに向ける。

「証拠を見せてやろう」

ビツと一筋の閃光が放たれた。

「しまつ…！」

バーギルはパティーシアの方を見る。

閃光はパティーシアに当たる直前、2つの大きな障壁によって防がれた。

「…なんだと…？」

障壁を展開させたのはパティーシアとミカエル。

バーギルはそれを見て安堵した。

「間に合ったか…」

「間一髪ってところ…かしら…？」

「『サタン』…私は間違っていたのでしょうか…私は全ウィザードのためにと言われ

神の降臨に全力を注いでいました…なのに、その神は…コモナーどころか人間全てを

滅ぼすと…」

「間違えなんて誰にでもあるわよ、ミカエル、大事なのは過去を見ることじゃなく今を見ること」

パティーシアはミカエルに手を差し伸べる。

「生きましよう、私たちも、寿命が何よ、エターナルコアの使命が何だってのよ、ふてぶてしく、

人間らしく、最後まで足掻いてやろうじゃない」

「『サタン』…」

「あいつの…受け売り、だけどね」

そう言ってミカエルにウィンクを飛ばす。

「不思議な…コモナーですね、あの人は…」

ミカエルは笑ってパーティーシアの手を掴んだ。

終章

「脆弱な人間どもが…余に楯突くか…」

神はパティーシアとミカエルを見下ろす。

「しかし…どうしますか？『サタン』、あいつにフレイミアやファイアーボールのような

小技は効かないと思われます、だからと言って詠唱の長い大技をやるうとすれば

その隙をやられてしまふ…」

パティーシアはそんなミカエルの言葉を聞いてふっと笑みを零した。

「力は同格でも産まれた年月の差ってやつかしら？

まだ青いわね、ミカエル、答えならあそこに転がってるわ」

そう言ってパティーシアはロンドの亡骸を指差した。

その行動を察したようにミカエルは頷く。

「…成る程、考えもしなかったですが…確かに、その方法しかなさそうですね」

「あいつに出来て、私たちに出来ないわけないわ、ま、小技の方が試して見ましようか」

「…わかりました」

そう言つとミカエルは神を見上げる。

「ここそとした話し合いは終わりか？では…殺させてもらつて、人間ども」

「させねえ！」

バーギルが飛ぶ。

神はその斬撃を避け、パティーシアたちの方を見直す。

そこにミカエルの姿が無かった。

「…どこへ消えた？」

「ここです」

ミカエルは神の後ろに回り込む。

神はミカエルの言葉に反応して後ろを振り向く。

「余所見しているのかしら？」

パティーシアが掌を神へ突き出す。

その掌から巨大な閃光が奔った。

ガギイイイイイイイイイン！！

神に当たる直前、神の障壁によって閃光は弾かれる。

「脆弱な人間が…詠唱を破棄した…だと？」

神はパティーシアの方へと振り返る。

今度はミカエルの掌からマグマの弾が神へと発射された。

「ちいー！！」

神が6枚の翼を丸め、マグマを弾く。

「貴様も詠唱破棄か！」

神はミカエルに向かって右手を振るう。

風の刃がミカエルに向かい、情け容赦なく飛んだ。

「余所見…してんじゃねえよ！」

バーギルが割り込み、風の刃を吸収する。

「あなたは自分の心配をしなさい、コモナー、その剣、神の魔法は吸収出来ても、

私たちの出来ないのでしょうか？巻き添えを食いますよ！」

ミカエルが右手を上げる。

瞬間、神を中心に大爆発が起こった。

「うおおおおお？」

爆発の衝撃で吹き飛ぶバーギル。

がしつと途中で座標転移したパーティーシアに受け止められる。

「しつかりしなさい、バーギル、
あんたにはその変な剣であいつに止め刺すって役割があるんです
から」

「…止め…？てめえ、封印がどうか…」

「そんな昔のこと、忘れたわね、倒せるんなら、倒したほうがいい、
そう判断しただけよ」

パーティーシアは髪をかき上げながら言った。

その言葉にバーギルは笑みが止まらなくなりそうだった。

「…く、くくく、よっしゃ、あのクソの魔法は全部俺が吸い込んで
やらあ！

てめえら攻撃に専念しろお！」

爆発した中心部から八方に電撃が飛ぶ。

バーギルはパティーシアに当たりそうになる電撃を封神の剣で吸収する。

ミカエルの右手から雷が、パティーシアの左手から氷の刃が放たれた。

神は左右の手で障壁を発生させそれぞれをガードする。

と、同時に翼から黒い羽先を3人目掛けて発射した。

「全部纏めて消し去ってやらあ！」

バーギルは剣を握る手に力を込める。

…が、パティーシアがそれを制した。

「あいつの魔法は出来るだけ蓄えなさい、その剣の耐えうる許容範囲、ギリギリまで」

ミカエルとパティーシアは同時に両手を前に出す。

虚無の空間が現れ、羽先を根こそぎ吸収した。

「コモナー！その剣で受け取ってください！」

虚無の空間が二つ、今度はバーギルの前に現れる。

そこから一つとなった巨大な黒い塊が出てきた。

バーギルは封神の劔を塊に向ける。

劔は塊を飲み込むように吸収した。

神は激昂した。

「下等な人間が！この余に、神である余に仇をなすか！！？」

ミカエルは神の真下に座標転移しながら落雷を落とす。

「あなたは神じゃありません、悪魔です」

次にパーティーシアが神の背後へ座標移動しながら風の刃で攻撃する。

「悪魔は淘汰されるものなのよ」

2人の攻撃は肉体的にはそんなに効いていなかったが精神的にはかなり効いていた。

「黙れ：黙れ黙れ黙れ！下等種族どもめ！！」

神を中心に黒い閃光が解き放たれる。

バーギルはその瞬間に神に斬り込んだ。

「てめえが堅いのはその妙な『壁』のせいだろ！？取ってやるよ、その邪魔なもんをよお！」

宝玉が光輝く。

神の周囲に展開された障壁が封神の劔に吸い込まれていく。

「余の障壁が・・・！」

神がそう言った瞬間、二つの雷撃が神を直撃した。

「が…は…！」

神の動きが瞬間、止まった。

「バーギル！」

「おおおおおおおおお！！！」

バーギルが動く。

神の残された防御方法、翼を狙って。

一瞬に6つの斬撃を加える。

神の翼は根元から6枚、引き裂かれた。

「人間ども！人間ども！人間どもがああああああ！！！」

神は手当たり次第に魔法を乱打した。

もう神の目には何も映っていない。

あるのはちつぽけだと思っていた3人の人間の存在に対する憎しみ。

そして、その3人に対する恐怖だった。

神の周りに4つの光の柱が作られる。

柱は線で結ばれ神をその中へと閉じ込めた。

「『サタン』！コモナー！」

ミカエルの作った監獄と言葉を合図にパティーシアはバーギルの所へと座標転移。

そして剣の柄をバーギルの手の上から握る。

「パティーシア…」

「余所見しない！これからこの剣に蓄えられた魔力に私の魔力を上乗せするわ、

そしたら目もくれず、あいつに突っ込むわよ！」

パティーシアの全身が光る。

呼応するかのように封神の劔が輝きだした。

「行くわよ！」

「おおおおおおおおお！！」

バーギルは剣を下に薙ぎ降ろした。

神は胸から下が真っ二つに裂け、体中から黒い蒸気が漏れる。

「余が…消え…る…！？余…の体が…ああああ」

神はその言葉を残し黒い蒸気となりこの世から消え去った。

「終わった…のか…？」

バーギルは呟く。

「どうやら、そのようですな」

ミカエルが2人に近づきながらそう言った。

「まだ、終わりじゃないわ」

パーティーシアが言う。

「まさか…まだ…？」

そのミカエルの言葉にパーティーシアはゆっくり首を横に振った。

「うっん、あの神との戦いは終わった、けど、居るでしょ？
私たちにこんな苦勞をさせた張本人が」

その言葉にミカエルがあっという表情をした。

「バークレイ様…いや、バークレイのことですね」

「そういうこと、全てを終わらせに行きましょう」

「悪いが俺はここまでだ」

バーギルがうつらうつらとした表情で言った。

「バーギル？」

「どうやらこいつを一度使つと1年くらい冬眠しなきゃいけない副作用があるらしくてな、
実を言つともう眠い…」

そう言つとバーギルの『足場』が消える。

慌ててバーギルを抱きかかえるパーティーシア。

「だから…あと最低1年…は、死ぬんじゃないぞ…パーティーシア…
決着はま、だ…ついて…」

そのままバーギルは深い眠りに落ちた。

パーティーシアはバーギルの頭をそつと撫でると、

「わかったわよ、貴方との決着がつくその日まで私は生き続けるわ」
そう言っで、寝ているバーギルのオデコに軽くキスをした。

地上に戻ったパーティーシアたちはバーギルをクレシスたちに託し、
バークレイの元へと飛んだ。

・ルシファー本部作戦参謀室・

パーティーシアとミカエルにとってはルシファーの防衛網など破れた虫網みたいなものだった。

2人を容易くバークレイの元へと運ぶ。

「全てに決着をつけに来たわ、バークレイ」

「これで終わりです」

2人の言葉にバークレイは深く椅子に座ったまま笑った。

「神までも敗れる…か、作るんじゃないかったよ、貴様らの様な欠陥品はな…」

そう言っているとバークレイは懷に持っていたナイフで自らの首を掻く切った。

この日、世界最大のウィザード組織、ルシファーは崩壊を向かえた。

「これから、どうするの?」

パーティーシアの問いにミカエルは微笑みで応える。

「残された時間、世界中を旅しようと思っています」

ミカエルは両手を広げて空を見た。

「この広い広い世界を今度は私の目で見て、手で触れて、感じていきたい」

「そう」

パティーシアも空を見て微笑んだ。

「あなたはとうするんですか？」

ミカエルの言葉にパティーシアは微笑みが増す。

「私？もちろん……」

その言葉にミカエルは一言、「羨ましいです」と答え、微笑んだ。

風が2人の間を吹き抜けて、時代は新しく移り変わる。

道を探すわ、ウィザードとコモナーが手に手を取り合える、そんな道を……ね。

〜
完
〜

終章（後書き）

どうも、はりねらいです。

最後まで読んで頂きありがとうございました。

初めてのオリジナル、長編（短いですが^^;）ということですがかなりグダグダですが少しでも楽しんでいただけたなら幸いです。

では、また次回作があればその時、お会いしましょうノシ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7387/>

エターナルコア

2010年10月9日03時09分発行